

称号及び氏名	博士（言語文化学）	岡村 知子
学位授与の日付	平成22年3月31日	
論文名	太宰治作品研究—語りの思想と方法	
論文審査委員	主査	山崎 正純
	副査	河合 眞澄
	副査	田中 宗博

〈論文要旨〉

本論文は、文学の語り、殊に太宰治の織りなす語りと、一方思想史や歴史学、哲学等の隣接領域における語りとの間に認められる両者の入りくんだ関係を、その語りを精読する作業を通じて考察したものである。それは自ずから、物語り内容の背後に存在する『語りえぬもの』（喜びや悲しみ、痛み¹の記憶の堆積）に、言語という「観念の手」を差し伸べ、触れようとする困難な営みとなる。以下、各章の概略を記す。

第一部「太宰治と変革の時代—歴史認識と民衆」では、丸山眞男の歴史叙述を参照しながら、日本の近代における「国民」という主体の形成過程（あるいはその過程への違和感）を、太宰治がどのように描き出したかを追究した。

第一部第一章『『ダス・ゲマイネ』論—〈賊〉言説と〈近代〉の外部—』では、「ダス・ゲマイネ」（『文芸春秋』一九三五年一〇月）に登場する青年たちに、吉田松陰や西郷隆盛が担った〈明治の精神〉への憧れを読み取り、昭和八（一九三三）年という転向の季節に、それを芸術の領域で復活させようとした彼らの試みの文学史的な意味を考察した。丸山が「忠誠と反逆」（『近代日本思想史講座 第六巻』筑摩書房、一九六〇年二月）の中で定義する〈明治の精神〉とは、抽象的な「原理」に〈忠誠〉を誓うことで、昨日までの〈忠誠〉対象であった「人格」や「組織」から身をもぎ離し、それへの〈反逆〉を開始する「エートス」を意味している。昭和八（一九三三）年当時において、青年たちが〈忠誠〉を誓うべき「原理」があるとすれば、それは徳川幕府以来、依然として「利を知つて義を知らざる」者、すなわち「基本的人倫の外にある」存在として位置づけられ続けた民衆の現実を、変革しうるものでなければならなかった。

第一部第二章『斜陽』論—母性保護論争と「道德革命」—では、大正七（一九一八）年から翌年にかけて行われた母性保護論争における與謝野晶子の発言に着目することで、「斜陽」（『新潮』一九四七年七月～一〇月）の語り手「かず子」の「道德革命」の内実を明らかにした。晶子は、女性が「男子に寄食すること」と「国家に寄食すること」を、ともに「奴隷道德」と呼んで否定した上で、男女がともに経済的な独立を維持することで、教育や学問や芸術といった〈精神的〉な営みを、経済的な領域から守り抜くべきだと主張していた。「お母さま」の死を乗り越え、「上原」の子どもを授かった「かず子」は、「上原」夫婦の娘と自身のおなかに宿った「小さい生命」が、ともに〈精神的〉な自立をとげられるよう彼らを導く、全く新しい道德を闘いとっていくことを決意している。

第二部「太宰治と創作の理論—物語りという行為」では、『語り』という営みをめぐる太宰治の問題意識が、「ロウ・ナラティヴィスト」（「物語りを外部をもたない自己完結した『テクストの織物』と見るハイ・ナラティヴィストの見解を退け、物語りを直接的体験（生きられた経験）を境界としてもつ外部に開かれたネットワークと見る立場」）を自認する野家啓一のそれに近接するものであることを指摘し、野家の『物語の哲学』（岩波現代文庫、二〇〇五年三月）に依拠しつつ太宰の諸作品を読み直すことを目指した。

第二部第一章『魚服記』『ロマネスク』をめぐってでは、柳田國男『山の人生』（郷土研究社、一九二六年十一月）の影響が見られる「魚服記」（『海豹』一九三三年三月）と「ロマネスク」（『青い花』一九三四年一二月）を扱った。「魚服記」の「スワ」や、「ロマネスク」の「太郎」「次郎兵衛」「三郎」らは、物語りの外部すなわち現実の世界において、共同体の利害に背反する存在として抑圧され、あるいは殺されていった者たちである。太宰治の著した二つの変身譚は、彼らのはかなくも潰えた「自己幻想」や「対幻想」（吉本隆明『共同幻想論』河出書房新社、一九六八年一二月）を、物語りの内部において実現させ、追悼する語りとなっている。

第二部第二章『女生徒』『皮膚と心』をめぐってでは、「女生徒」（『文学界』一九三九年四月）と「皮膚と心」（『文学界』一九三九年十一月）を精読することで、フェミニズムの理論において、言語的な構築物でしかないとされるジェンダーやセックスが、語り手の女性たちの心身を蝕み、ときに癒すものとして「物質化」（竹村和子『思考のフロンティア フェミニズム』岩波書店、二〇〇〇年一〇月）される諸相を考察した。「だつて、女には、一日一日が全部ですもの。男とちがふ。死後も考へない。思索も、無い。一刻一刻の、美しさの完成だけを願つております。」と語る「皮膚と心」の語り手のように、〈女〉という物語りを無批判に受け入れ、自らを劣位に位置づけていた女性が、〈女らしさ〉を「物質化」する

社会過程に抵抗する生を選びとっていくための動因としての〈女語り〉を、太宰は物語り続けたのであった。

第二部第三章「『冬の花火』『春の枯葉』をめぐって」では、「冬の花火」（『展望』一九四五年六月）と「春の枯葉」（『人間』一九四六年九月）という二つの戯曲を取り上げ、ヤコブソンの言語の二軸理論——隠喩的過程と換喩的過程——を援用しつつ論を展開した。語と語の間に相似性が認められ、隠喩が成立するか否かは、物語りの聴き手に委ねられており、そこでは常に命がけの『飛躍』が行われている。そして、聴き手はその命がけの『飛躍』へと自己を駆り立てる動因となるものこそ、『語りえぬもの』によって呼び覚まされる『痛み』の感覚にはほかならない。換喩的なリアリズムが支配する日本の新劇界において、太宰は隠喩表現を駆使することで、観客の痛覚に訴えかける作品を生み出したのだと考えられる。

参考論文として収録した「久保栄『火山灰地』試論——リアリズムの基底——」では、第二部第三章と同様の方法論を用いながら、久保栄の代表作「火山灰地」（『新潮』一九三七年一二月、一九三八年七月）の構造分析を試みた。昭和一〇（一九三五）年に、中国共産党内部の軋轢を描いた「中国湖南省」を発表し、昭和一二（一九三七）年から翌年にかけて、日本農業の概括化を目指したとされる「火山灰地」を発表した久保の問題意識は、『中国統一化』と『国民生活安定』という、同時代における焦眉の課題に即応するものであった。彼は、反植民地主義・反資本主義の統一戦線その内容とする組織論と、独自の創作理論とを生み出すことで、その難題に応えようとしていたのだ。「火山灰地」を貫く創作理論とは、舞台上の空間に繰り広げられる劇的相克の一つ一つが、朗読と唄によって立ちのぼる垂直の時間を媒介とすることでその歴史的意味を観客に開示し、彼らを現実変革へと立ち上がらせる可能性をもつものであった。

以上のように、本論文は、太宰治によって語られた物語り内容を、その背後に存在する『語りえぬもの』を想起することで歴史化し、文学史（あるいは思想史）のなかに位置づけ直すことを目的とするものである。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、太宰治の作品に表現された思想と、作品に内在する創作の理論とを、思想史、歴史学、哲学等の隣接領域における諸言説を参照しつつ明らかにすることを目指したものである。言語文化学専攻が定める審査申請要件を十分に満たしており、予備審査及び本審査において厳正な審査を行った。以下、五つの基準に照らして、研究成果として評価される点に

ついて具体的に述べることにしたい。

①研究テーマが絞り込まれているか。

「太宰治作品研究—語りの思想と方法」と題する本論文の中で論者は、随筆等を含め、25作品におよぶ太宰治の著作に言及しながら、一貫してそれらの読み直しと再評価を試みている。第一部「太宰治と変革の時代—歴史認識と民衆」では、主として丸山眞男の歴史叙述を参照しながら、日本の近代における「国民」という主体の形成過程（あるいはその過程への違和感）を太宰治がどのように描き出したかを追究しており、第二部「太宰治と創作の理論—物語りという行為」では、『物語の哲学』をはじめとする野家啓一の一連の論考に依拠しながら、太宰治の作品に内在する創作の理論を析出し、再定義することに成功している。したがって、研究テーマの一貫性を求める本専攻の審査基準第1項を十分に満たしていると判定する。

②研究の方法論が明確であるか。

本論文は、太宰治の作品と思想史、歴史学、哲学等の隣接領域における諸言説との間に認められる入り組んだ関係を、双方のテキストを精読する作業を通じて考察することをその方法論としている。例えば、第一部第二章『斜陽』論—母性保護論争と「道徳革命」—では、大正七年から翌年にかけて行われた母性保護論争における與謝野晶子の発言に着目することで、「斜陽」の語り手「かず子」が掲げた「道徳革命」の内実を明らかにしており、第二部第三章『冬の花火』『春の枯葉』をめぐってでは、ヤコブソンの言語の二軸理論（隠喩的過程と換喩的過程）を援用しつつ、太宰治のドラマツルギーを追究している。このような方法は、本論文の目的に照らして適切なものであり、全章を通じてこの方法論が堅持されていることは、巻末にあげられた引用文献一覧を見ても明らかである。したがって、方法論的確さを求める本専攻の審査基準第2項を十分に満たしていると判定する。

③先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられているか。

各作品の先行研究については、本論文の本文中および注において、詳細な言及が見られる。例えば、「序—「盲人独笑」に寄せて」では、『葛原勾当日記』に虚構を施した太宰の行為を、「葛原勾当の文章を引き、模倣しながら、それを奪っていくプロセス」（高橋広満「太宰治と井伏鱒二」）と捉える先行論文に対し、吉本隆明「身体論（V）」を援用しつつ反証している。また、第一部第一章『ダス・ゲマイネ』論—〈賊〉言説と〈近代〉の外部—は、先行研究において、四人の青年たちが作者太宰の分身と見なされ、自意識過剰文学の典型としてこの作品が位置づけられてきたのに対し、作品に描き込まれた西郷隆盛の銅像や、『海賊』という名の同人誌を積極的に意味づけた点で、新たな読みの可能性を提示し得ているといえるだろう。したがって、先行研究に対する知見の深さを求める本専攻の審査基準第3項を十分に満たしていると判定する。

④結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的であるか。

本論文の特徴として、位相の異なるテキストを多様な論理を媒介とすることで結びつけ、新たな読みを導き出している点をあげることができる。例えば、第一部の序では、丸山眞男

「肉体文学から肉体政治まで」に、太宰治の随筆「如是我聞」の影響が見られることを、両者に共通する私小説批判の要素を検討することで明らかにしている。また、本論文の結びでは、石牟礼道子の「苦海浄土」と、太宰治の「津軽」や「饗応夫人」を合わせ読むことで、ともに辺境の地に出自をもつ彼らに共通する“饗応”の文化の内実を明らかにしている。したがって、論理的な一貫性を求める本専攻の審査基準第4項を十分に満たしていると判定する。

⑤当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容であるか。

丸山眞男の「忠誠と反逆」を参照しながら、「ダス・ゲマイネ」に登場する青年たちに〈明治の精神〉への憧れを読み取った第一部第一章、母性保護論争を参照することで、「かず子」が目指す「道徳革命」の内実を明らかにした第一部第二章、吉本隆明が『共同幻想論』の中で提示した概念（「共同幻想」「対幻想」「自己幻想」）を用いながら、「魚服記」と「ロマネスク」という二つの変身譚の構造を明らかにした第二部第一章、物語り行為論における「ハイ・ナラティヴ」と「ロウ・ナラティヴ」という二つの立場の違いに注目しながら、後者の立場から「女生徒」と「皮膚と心」を読み解いた第二部第二章、ヤコブソンの言語の二軸理論を援用しつつ、「冬の花火」と「春の枯葉」を最評価するための新機軸を提示した第二部第三章は、いずれも、太宰治作品の再評価を進めていく上で、有益な問題提起をなし得ていると考えられる。したがって、研究の独創性を求める本専攻の審査基準第5項を十分に満たしていると判定する。

以上述べてきたように、岡村知子氏は、太宰治の文学と他領域との間に認められる思想的な交流を明らかにすべく、一貫した研究姿勢を堅持し、その成果であるこれら一連の論考によって、新たな研究段階へと踏み込み得たものと言ってよい。本論文が太宰治文学研究に新たに付加した知見は、今後の研究の展開に裨益するところが大きい。審査委員会による慎重かつ厳正な審査の結果、本研究が博士（言語文化学）の学位に値するものと判断するものである。

なお、本論文の審査は、2010年1月18日、1月22日、1月29日の3回にわたり、主査および副査の3名の審査委員によって実施し、全員一致で合格と判定した。